

まえがき

2016年5月にバラク・オバマ (Barack H. Obama) 大統領が、アメリカの大統領として初めて広島を訪問した。平和記念公園で行なった17分間の演説の冒頭で同大統領は、次のように述べた。「71年前、晴天の朝、空から死が降ってきて世界が変わりました。閃光(せんこう)と炎の壁がこの街を破壊し、人類が自分自身を破壊する手段を手に入れたことを示しました」(『毎日新聞』[電子版] 2016年5月28日)。原子爆弾(原爆)開発の始まりから、「空から死が降ってきて世界が変わ」ることとなるアメリカによる日本への原爆使用へと至る道のりは、いったいどのようなものだったのか。本書はそれを示そうとする試みである。

本書の執筆にあたっては、原爆の日本に対する使用へと至る過程を、筆者の能力の及ぶかぎり一次資料に基づいて、しかも1990年代以降の論争を踏まえつつ、分析し記述することをめざした。そうすることを通じて、原爆の開発と使用についてのこれまでの研究を統合して発展させることが、本書の学問上の目的である。その目的を本書は達成した、という評価を本書の読者から得ることになれば幸いである。

本書がめざしたことがほかにも2つある。その1つは、根拠に基づいた分析と記述を読者に提供することである。十分な根拠に基づかず(ときには事実を反した根拠に基づいて)、アメリカによる原爆使用について論ずる言説が日本ではしばしばみられる。そのような言説とは一線を画して本書は、学術的な著作の基本である根拠に基づいた論述をめざした。

本書がめざしたもう1つのことは、本書の議論が根拠としたものを裏づける証拠を示すことによって、読者が本書の議論を検証できるようにすることである。そのために、やや分量が多くなった註の中に証拠となる資料をすべて示した。すぐれた研究の裏づけをもって著された著作物の中には、議論の根拠を裏づける証拠を十分に示していないために、そこに示された研究成果を読者が検

証できなかつたり、そこで展開された研究の過程を追体験することができない、という残念なものがある。やはり学術的な著作の基本である証拠となる資料の提示によって、本書が読者の知的欲求に応え、あわよくば原爆の対日使用を研究課題とする研究者の育成に貢献する結果をもたらすことになれば、それはやはり幸いである。

なお、本書の記述に誤りがあるとすれば、それはすべて著者の責任である。